

〈書評〉

加藤九祚著

『ユーラシア野帳』 (恒文社)

(東京大学教養学部) 山内 昌之

イギリスの地政学者マッキンダーがユーラシア大陸の中核地帯となづけた中央アジアの地には、サイレーンの蠱惑にも似た妖しい魅力の磁石がひそんでいるのであろうか。マルコ・ポーロやウィリアム・オヴ・ルブルックのいにしえは無論のこと、近代に入ってもシルクロードの幻影にひかれる者はあとを絶たなかった。

十九世紀このかた、前途に立ちはだかる危険のものともせず、中央アジアへの険しく時間のかかる旅に挑戦する人びとの流れは、たとえ細々としてはいても途切れることはなかった。しかし、旅行者たちの志や目あてとなると、その言葉や民族や出自の異同に負けず劣らず多彩であった。

かれらのなかには、大胆きわまりない冒険、未知の自然と人間に接した興奮を文才と写真の力をかりて、旅行記に仕立て上げる人物もいた。時には、危険からの脱出や手柄話を潤色しがちなために、真偽を疑いたくなる作品にもお目にかかることがある。

それでも名声は名声である。豪胆で恐れを知らない旅行家のペンから冒険譚がほとばしりでて、多色刷のスケッチに飾られた書物が江湖で評判を博すると、そこにはロマンの香りさえ漂うようになる。これは、オリエンタリズムという新しい神話の始まりでもあった。そうは言っても、かれらの仕事をけなしてばかりもいられない。かれらが描いた人物や風景の模様は、まるで事情にうとい別の世界の人びとの心に絵をつくりあげ詩をうたわせるのに役だったかもしれない。そもそも、外国で安楽椅子にすわってパイプをくゆらせながらシルクロードのロマンの想いを馳せる人にとっては、知識欲の充足を素直に喜ぶ場合もあったに違

いない。それも異国理解の事始めというものであろう。

ヨーロッパ人の中央アジア旅行記については、その作品一覧が一冊の本になるほど汗牛充棟の様子を呈している。たちどころに思い浮かぶのは、ハンガリー人オリエンタリストのアルミニウス・バムベリーの仕事である。この筋金入りのロシアざらいは、オスマン帝国のスルタン=アブデュルハミト二世の庇護を受けるとともに、しばしばイギリス政府に奉仕して貴重な現地情報を提供したことでも知られる。

1870年から76年にかけてサンクト・ペテルブルクのアメリカ総領事だったスカイラーも浩瀚なトルキスタン旅行記を残している。ジャーナリストとしては、『ニューヨーク・ヘラルド』紙のマクガーハンの仕事も有名である。

しかし、何と言っても中央アジアはイギリス人が俊敏な水すましのようによぐ(ゆうよく)するステップのオアシスと海のおもむきにも似ていた。イギリス陸軍近衛大尉のフレデリック・バーナビー、イギリス国教会牧師の人道主義者ヘンリー・ランズデルのように本国ではさほどの貴顕ならざる人士も歴史に残る旅行記をものしたほどである。

また忘れてならないのは、1886年に出版された西徳二郎の旅行記録『中亜細亜紀事』、1893年にクリミアを出発した有名なイスラム改革主義者イスマイル・ベイ・ガスプリンスキーの旅行記録、1908年に西域探検のため京都を出発した橋瑞超の『中亜探検』の意義であろう。

これらは、一風変わった中央アジア見聞録に見えるかもしれない。「変わった」というのは、ヨーロッパ人の記録になじんだ者にとってのことである。しかし、中央アジアがイスラムの世界やアジアに属することを考え合せると、この旅行者たちほど歴史の記録を残すにふさわしい者はいなかったにちがいない。

時が移り二十世紀が進行するなかで、かつての

グレート・ゲームの舞台、中央アジアの運命は一変した。その土地はソビエト連邦と中華人民共和国という二つの社会主義大国の領土となって外から久しく遮断されてしまったからだ。その地は、まるで現代日本の地域研究にとっては「未知の土地」(terra incognita)になったかのようである。それでも、中央アジアを軸としたユーラシア内陸部へ関心と憧憬を抱く人は絶えなかった。しかも、学者がシルクロード辞典を編み、市民のあいだにも熱心な愛好者さえ出るという日本史上でも未曾有の時代でもある。しかし、いわゆる<シルクロード・ブーム>のなかで、書齋のブッキッシュな知を現地体験や見聞の記録と結びつける学者は少なかった。その数少ない例外が、『ユーラシア野帳』の著者加藤九祚氏である。

この書物には、トルコから中央アジアをへてシベリアにいたる広大なユーラシア大陸を調査旅行した時の見聞をもとに、とくに1985年以降に発表した小さな文章が集録されている。随筆と旅行日誌から成るこの本には、随所に著者の人柄がしのばれる観察がちりばめられており、興味深いエピソードの紹介、シベリアでの抑留体験、様々な人びととの出会いなどの語りを通して、読む者の心をユーラシアの魅力へ招待するしかけがほどこされている。ここでは一例として、十世紀の中央アジアが生んだ天才イブン・シーナーの『医学典範』第20章、第21章にまつわる話を紹介しておこう。執筆者はいわずとしれた、哲学・数学・天文学・医学に通じた<万能人>アヴィセンナのことである。加藤氏がロシア語訳で読んだこの著述は、イブン・シーナーの代表作である。

イブン・シーナーは、サーマン朝の首都ブハラの近くで生まれたが、ネストリウス派キリスト教徒の師から医学を学んだ。その主著『医学典範』は、医学とは何かの説明から始まって、解剖、疾患とその原因、健康の保持、治療、薬、内臓器官の構造など医療全般を扱った名著であるが、二つ

の章には男女の生み分け法や、性欲の増進および抑制の方法が述べられている。男性がシンボルを大きくし、女性がシンボルを小さくするにはどうしたらよいかと、この天才は真面目に秘法を披露している。

男性の場合には、わりあい固い布切れに熱い脂またはバターを塗ってシンボルをこすり、羊のミルクをふりかける。また血液がシンボルの方へきまって流れるように、ジフトという糊に似た薬を塗り付ける。これを毎日、朝夕かかさず丹念に繰り返すのである。あるいは別に、ヒルを汁のあるヤシの実の殻にひたして干したものをシンボルに塗りこむやり方もあるという。

女性の場合はどうか。それは、ナデシコ、オグルマ、アロエなどに若干のジャコウを加えて、毛織物の切れに塗り付け、マيسサンという液にひたして挿入する。また、熟する前の虫コブや、芳香のあるフトイの花をつぶして篩にかけ、布切れに塗ってブドウ酒にひたし挿入するのも可である。また、ミョウバン、カサマツの皮、スティティという草をブドウ酒で煮こんで塗り込むのもよい。

謹厳なイブン・シーナーは、こう付け加えることも忘れない。手を尽した努力は医者にとっても、それを欲する人びとにとっても決して恥ずかしくない、と。なぜなら、この試みは子孫を生むという真面目な行為に関連しているからである。どことなく、現代日本の善男善女でもあわてて弁解しそうな言種に似ているところが面白い。

もっとも、ユーモアの感覚にとんでいるが謹直な加藤氏は、ここに紹介したことが名著『医学典範』のごく枝葉末節でしかないと律義に断っている。わたしもまた、加藤氏のエッセイがこの書物の話題豊富で多彩なアラカルトの一部にすぎないことを最後に断っておく必要があるだろう。

(1989年9月刊, A5判, 370頁, 2300円)